
RAINY GIRL

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAINY GIRL

【Nコード】

N8694K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

雨の日の学校帰り。喧嘩した彼女と出会って。高校生の淡いお話です。光GENJIのアルバムの曲からヒントを得ました。

第一章

RAINY GIRL

会いたくはなかった。けれど会ってしまった。

正直姿を見た時しまったと思った。別の場所に行こうと思った。

けれど向こうも僕に気付いて。目と目が合ってしまった。

「あっ……」

「やあ」

バツの悪い顔で言葉を返した。

けれどそれ以上は出なかった。出せなかった。

それで戸惑っているとした。彼女の方から言ってきた。

「あの」

「あの？」

「一緒になりたくはなかったわ」

こう言ってきたのだった。

「今日は」

「そう言っんだ」

「だって」

僕から慌てた素振りで顔を背けてた。そのうえでの言葉だった。

「今日は。あんなことがあったから」

「そうだね」

僕も彼女の今の言葉に頷いた。今日僕は喧嘩した。そのことを雨の中で思い出した。僕は今駅のプラットホームにいる。学校帰りの駅のホームに二人だ。線路は濡れていてそこに雨が降り続けている。雨は強くないけれど止む気配はない。透明な雨がしとしと降り続けている。静かに。

その雨を見ながら思い出していた。僕達の喧嘩のことを。

些細なことだったけれど言い争ってだ。彼女は遂に泣きだした。クラスの中で派手に泣きだした。

理由は詰まらないことだったけれどそれでも泣いてだ。周りもあれこれ騒いで大騒ぎになった。僕も彼女もそれからずっと口を聞いていない。

そのまま学校の授業を終えて帰るその時にだ。ここであたり会ってしまたというわけだ。奇遇と言っべきかタイミングが悪いと言っべきか。

その彼女と会ってだ。僕は雨を見ながらそのうえで話すのだった。

「あのさ」

「ええ」

「喧嘩したのはさ」

「お互い様ね」

彼女も前を見ている。その雨を見ながらの言葉だった。

「それはね」

「お互い様なんだ」

「けれど。私がつい」

「そして言ってきた。」

「泣いてしまつて」

「いいよ」

僕はそれについてはこう返した。言っても仕方ないと思ったからだ。過ぎたことをあれこれ言うのは好きじゃなかった。本当に今更だった。

「そんなことは」

「そう言ってくれるの」

「だからいいよ。それよりさ」

「それよりも？」

「電車まだ来ないよ」

話を変えた。そちらにだ。

「まだね。来ないよ」

「そつ、来ないの」

「うん、十分はあるから」

十分はある。立って待つには少し辛い時間だった。

「どうする？座る？」

「そうね」

前を俯き加減に応えながら言ってきた。

「それじゃあ」

「うん、じゃあ」

こうして僕達は後ろにあるプラスチックの、駅のホームには何処にもある席に並んで座った。ここでやっと傘を畳んだ。傘の水はかなり落ちていた。

その傘を畳みながら。僕はまだ前を見たまま彼女に言った。

「今日始めて話したかな」

「いきなり喧嘩したから」

「そうだったね。はじめてだね」

彼女の言葉に応えて述べた。

「思えばね」

「そうね。それにしても」

「それにしても？」

「嫌な一日だったわ」

こう言ってきたのだった。

第二章

「本当にね」

「そうだね。何かやけに長く感じたよ」

「いつもはこんなに長く感じないのに」

俯いたままの言葉だった。僕は何とか顔をあげていたけれど彼女は違っていた。

「けれど今日は」

「そうだね、本当にね」

「こんなに長く感じたことなかったわ」

「それに。嫌な一日だったよ」

こつとも言い合った。

「全くな。そつちも同じこと思ってたんだ」

「そつちもだったのね」

「そうだね。同じだったんだ」

「ねえ」

そしてだった。彼女の方から言ってきた。

「これからだけれど」

「これから？」

「もう。こんな思いはしたくないから」

こつ言ってきたのだった。僕に対して。

「仲直りしない？」

「そうだね」

僕にしても反論はなかった。する筈もなかった。それだけ嫌な気分であり続けたからだ。嫌な思いを好んでしたい人間もない。

「これでね」

「そうね。仲直りしましょう」

「だったらさ。これからだけれど」

「これから？」

「うん、雨だけれどね」

それが残念だったけれどそれでもだった。僕は言った。

「何処か行かない？これから」

「デートなのね」

「そう、雨上がりのデート」

それをしようと提案した。仲直りにはそれが一番だと思ったからだ。

「それがしたいけれど」

「それは無理よ」

けれど彼女はこう言ってだ。そのうえでの言葉だった。

「それはね」

「どうしてかな、それって」

「だって。雨はまだ降ってるから」

言ってきたのはそれだった。確かにあがる気配はない。何時まで振り続けてくれるのかわからない位だ。少なくとも水不足の心配はなさそうだけれどそれでも止む気配がない。それは確かだった。

「それじゃあ」

「雨の中のデートになるわ」

「そうか、雨の中か」

「雨上がりのデートはできないわ」

そしてまた僕に言うてきた。

「雨の中ならね」

「それならいいかな」

僕は言葉を変えた。そのうえでまた提案した。

「雨の中でも」

「ええ」

はじめて僕に顔を向けてくれた。そのうえで。にこりと笑ってだ。そうして僕に答えてくれた。

「御願いするわ。是非ね」

「うん、それじゃあそれでね」

僕が今行ったところで前に電車が来た。絶好のタイミングだった。僕はその電車を見てだ。あらためて彼女に言った。

「行こうか、今から」

「何処に行くの？それで」

「それはそれから決めるけれど。まずはとにかくね」

「電車にね」

「うん、乗ろう」

今度の提案はこれだった。最初にだ。

「じゃあね」

「ええ、それじゃあ」

彼女も笑顔で僕に応えてくれた。そうしてだった。

僕達は同時に立ち上がりそうして電車に向かった。そのうえで二人で一緒に電車に乗って。雨の中のデートをはじめた。今日の雨は悲しい雨じゃなくて仲直りの雨だった。そうなった雨だった。

RAINY GIRL 完

2010・4・13

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8694k/>

RAINY GIRL

2010年10月8日15時24分発行